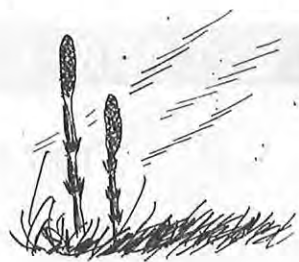


随想



っているらしい、せまい、そして寒風の吹き入るような処だったからです。

「目の不自由な人たちに、早く読んで戴かなければ……」と、はずむ思いで、点訳した紙の束を持って訪れた私の胸も一瞬、しほむ思いでした。

「一日も早く、県立の図書館にしてもいいのです。」と、過日、おっしゃっていた西館長のお言葉が思い出されました。

点字図書館が県立でなく、法人で運営されているのは、九州では熊本と、もう一県だけども聞いています。

ある会で、私は、こんな話を聞いたことがあります。

「自分の身に、負い目を持っている人は、あわれみをかけられる事を欲してはいません。彼等は、勇気を持てるようになる為の力を貸して欲しいと念じているのです。」と。

県内には、視力障害者手帳を持っている人(わかつている数の意)が、一万人はいるそうです。その障害者にとって、大きな力添えとなっている点字図書館のこの粗末さは、どうした事だろう、と私は、たまらない気持ちでしたのでした。

いつの頃からか、私は世の中に光のあ

てられる事の少ない人たちが、大勢いらっしやって、私たちの知らない苦労をなめていらっしやる事を思うようになりました。普段の生活に不自由をしないですむ者として、せめて身体障害者の願いを心にとめてあげたい、出来る事なら、かなえられるようにしてあげたい、と、点訳の奉仕を思い立ったのでした。

けれども、障害を負っている人たちのために、何かをしてあげられるには、個人の力はあまりに微力なのです。これは、どうしても福祉の政策をまつより他ないようです。

うれしい事に、点字図書館は今年の秋頃には、建物も新たに県立となる事が決まったそうです。私にとっては、何よりの新年にふさわしいお年玉となりそうです。

熊本県も、いろいろの方面に飛躍的な発展を遂げ、私たち県民の生活も潤ってまいりました。そこで、今年には行政としての派手さこそありませんが、点字図書館の県立化を初めとする、多方面の福祉行政が、一段と充実され、身体障害者に一層の光があてられる事を、切に願わずにはおれません。

(主婦)

そして残っている私も今は古稀の齢を数えた。身辺とみに淋しいというものが、この数年の私である。そういう私を僅かに支えているのは短歌の雑誌である。その雑誌を西村と共に創刊したのは二十三年も前のことであつた。西村の死後、私は狼狽でその運営にあたらねばならなくなった。後継者と目していた年若な友人が二人もこの世にいなくなった。私は歯をかみしほって雑誌を続けねばならなくなった。

昨年の夏、その雑誌が二百五十号を突破した。二十二年間、仰山にいえば、私一人で続けて来たのであつた。その祝賀会の折、仲間から私の歌碑建立の議が起こつて、私のお墓みだからと回辞する私を叱つて、荒木精之君を中心にする期成会が出来てしまった。荒木氏は私に一切黙つて手を触れるな、という。そして一日で建設の場所もきまつてしまった。千葉城のNHK下の元師団長官邸跡の高橋公園だといふ。

この公園には名誉市民だった高橋さんの記念碑が立っている。私は熊本商大開設当時、高橋守雄氏の部下で、学生部長をしていた。そのお葬式も学生の指導をとつたのである。高橋さんが若くて熊本市長だった時、市会議長をつとめた迫源次郎は私の祖父の末弟であつた。国立から唯一人飛び込んだ教授の私はそのいわゆるこわい小父さんにある意味で可愛が

漁民のコミュニティ

一 構想

桑原 莞爾

今年で日本は戦後三十周年を迎えるが、この間、バラ色の期待を込めてしばしば使われてきた言葉に「近代化」なる一語がある。但しその意味は必ずしも一義的ではない。仮にこれを「工業化」と同義とすれば、近代化は一方で戦後社会の高度経済成長を促すとともに、他方でこれに伴う様々の歪みを遺したといえるであろう。一昨年末の「石油危機」以来、戦後社会近代化のバランス・シート如何が注視されざるをえないゆえんである。こうした近代化の裏面の問題の一つに、都市の過密、農村の過疎問題があることは周知であろう。特に工業化の犠牲となった農山漁村において問題は深刻であり、伝統的共同体社会は崩壊の危機に直面し、いわゆる「ムラ」の生活は成り立ち難くなっている。こうした危機に自覚的に取組み、「地域(共同)社会」(コミュニティ)再建の運動が生じたのは

「老兵は消えてゆく」というが、今の私にはこの言葉をいかに生きるか、との思いにうたれて来た、と言えなくもない。その時、私の歌碑が高橋公園に建つことになった。翁の胸像のある公園の一隅に、一種の殉死の形で私の歌の魂が眠るのだ、と思うと私の最後の場所を作ってくれた荒木君らの友情がひとしお身にしみるのである。

私はすみなめた学園を一年早く退くことが出来るのである。かたじけないことだ、と思う。みきりをつけたという人も出るであろう。そんなことはどうでもいい。人は何とでも考えるがよい。今の学生は私など明治生まれの人間とは肌が合わぬことがある。腹を立てると血圧が上がる。私の余生は乏しい。そんなら自分の好きな生活をしてこの世を終わりたい。そしてどうせ何かでも後に残るものがあるとし、その場所が高橋先生の公園の一隅となるであろうことに、私は私なりに一つの幸福を感じているのである。持つべきものは友情なりとの感に打たれている私である。

(歌誌南風主宰)

当然である。本誌十五号(一九七四年)に紹介されている「新しいふるさとづくり」は、そうした運動の一端を窺わせるものといえよう。

では、こうしたムラづくりの基本視角は如何にあるべきか。一昨年、熊本県の策定した基本構想によればこうである——「魅力のある地域社会は、単なる施設の整備や所得の増大によって達成されるものではなく、住民みずから地域社会の形成に参加し、そうした自主的な参加によってえられる地域社会への連帯感や愛着の心を基盤として、はじめて実現されるものである」と。右の提言はまことに時宜をえたものと評価されるが、問題は「精神」とともに、そもそも過疎地の生活(経済)基盤を如何に確保してゆかかあるといえるのではあるまいか。以下、過疎地の一典型、天草・崎津の漁師A氏の「生活圏確立」の構想をごく簡単に紹介したい。

まず氏の主張の根本は「天草を捨てななくても生きてゆける生活」の確保にある。一般に沿岸零細漁民は漁業資源の枯渇に伴い、「沖へ沖へと出てゆく漁業」を営んでいるが、氏の主張の要諦は、こうした志向を改め、漁業に「分業と協業」を導入することにある。まず、青年漁民は「沖の漁業」を営む。ついで中年層は資力と経験をもつ故、協同の栽培漁業(養殖事業)が可能である。残る老

年漁師は、近年のレジャー時代開幕とともに激増した遊漁者と共存し、舟釣り、瀬渡し等によって十分生活をたててゆくことができる、というのである。勿論、この場合、遊漁者の側に魚釣りのマナーとモラルが要求されることは詳言するまでもない。いずれにせよ、原形型漁業に替る「分業と協業」の沿岸漁業、換言すれば限られた漁場の立体的利用によって、崎津の「生活圏」は確保されようというのが氏の提言である。コミュニティ運動が成功するためには、先の県基本構想の精神とともに、こうした地域社会形成主体のいわば「生活の思想」が重視されなければならないと痛感する次第である。

(熊大法文学部助教授)

高橋公園の歌碑

蒲池 正紀

熊本に帰つて二十四年目である。私を今の大学に呼んだのは、学友の丸山学であった。その彼も四年前心筋梗塞で、学長になったばかりでこの世を去つた。今一人の親友で前に八代市議会の議長をしていた歌の上の兄貴の西村光弘も、その一年ばかり前他界した。